

mundi



[ムンディ]

2013 November No.2 **11**

特集 ASEAN

そして、未来へ



アフリカで日本の技術発見！

from Rwanda ルワンダ



「あれ？ここは日本？」

そう錯覚してしまうような風景が広がっていた。アフリカの内陸国、ルワンダのブゲセラ郡。辺り一面に水田が広がり、まるで日本の農村のよう。この地域では、日本の協力で農村開発が行われているという。

電力不足のルワンダでは、昔懐かしい手押しの除草機が大活躍。日本の先人たちが編み出した技術が、日本から遠く離れたアフリカの地で用いられているとは、何とも不思議な光景である。

腰まで田んぼに漬かって遊んでいる子どもたち、赤ん坊をあやしむ草取りに励む母親など、水田には人々の日常があった。そこに日本の技術を見つけ、何ともうれしい気持ちになった。

国民の多くが農業に従事するルワンダ。日本の農業技術や知識が、彼らの今と未来に大いに役立てられることを祈る。



撮影：遠藤朋子（千葉県／2013年国際協カレポーター）

あなたの作品募集中！

「my photo」では、あなたが撮影した写真を募集しています。貧困や環境問題などをテーマにした写真、国内外問わず国際協力の最前線で活動に励む日本人や途上国の人の姿、テレビや新聞ではなかなか報じられない土地の風景や人々の暮らしなど、国際協力や開発途上国を身近に感じられる写真を、撮影時のエピソードを添えてご応募ください。応募作品の中から毎号1枚、本コーナーで紹介させていただきます。

応募条件 ①応募者本人が撮影した作品に限ります。②被写体に関する肖像権は、応募者の責任において了解が得られているものとします。③写真は、解像度が300万画素以上(目安)で撮影されていること、また画像の記録形式はJPEGを推奨します。

応募方法 お名前、連絡先(電話番号とEメール)、エピソード(300～350字)、記名の可否をご記入の上、写真とともに応募先アドレスまでEメールでお送りください。
*応募作品は本コーナーのほかに、事前確認の上でJICAの広報活動に活用させていただく場合があります。ご記入いただいた個人情報はこちら以外の目的では使用いたしません。また、応募作品はご返却いたしませんので、あらかじめご了承ください。

応募 / 問い合わせ先

jica-photo@idj.co.jp

(「mundi」編集部宛)

「mundi」はラテン語で“世界”。開発途上国の現状や、現場で活動する人々の姿を紹介するJICA広報誌です。

Contents

02 my photo アフリカで日本の技術発見! ルワンダ

04 特集 ASEAN

そして、未来へ

人がつなぐ知のネットワーク ベトナム & カンボジア
光差す新薬作りへの道 タイ
国を支える“知”を生む力
つながる絆 — 21年ぶりの再会 — ブルネイ



18 PLAYERS

土をつくり、人をつくる

公益社団法人国際農業者交流協会



- 20 JICA Volunteer Story 本間 洋平 民間連携ボランティア／株式会社サガミチェーン
- 22 世界とつながる教室 国際協力で自由研究やっちゃおう! JICA北海道 小学生イベント
- 24 JICA STAFF 樋口 創 JICA東南アジア・大洋州部 東南アジア第二課 調査役
- 25 JICA UPDATE
- 26 ココシリ 「ここが知りたい」いろんなトピックを分かりやすく解説!
- 28 VOICE 安田 菜津紀 フォトジャーナリスト

30 地球ギャラリー

メキシコ

伝統が息づく町



- 37 イチオシ! 本・映画・イベント
- 39 MONO語り お母さんの優しさが詰まったポーチ
- 40 私のなんとかしなきゃ! カズン 歌手



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙
撮影：高橋智史
カンボジア・トンレサップ湖に昇る朝日



可能性と 魅力あふれる地域

バリ島、バンコク、ホーチミン、アンコールワット……。長い休みは取りづらけれどちょっと海外に行きたい、という人にはうってつけの場所。買い物ができる都市あり、海がきれいなリゾートあり。屋台からおしゃれなレストランまで、おいしいエスニック料理も楽しめる。同じアジアとあって、街を歩く人々の雰囲気もどこか似ている。日本人にとって身近な存在だ。

これらの国には共通点がある。そう、全てが東南アジア諸国連合 (Association of South East Asian Nations : ASEAN) の加盟国。1967年、域内の成長と発展を目指して設立されたASEANは、インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイの5カ国でスタート。その後、ブルネイ、ベトナム、ラオス、ミャンマー、カンボジアが加わり、現在は10カ国で構成されている。

そして今、ASEANは未知なる可能性にあふれた市場として、国際社会から注目を浴びている。97年のアジア通貨危機から復活を遂げ、国内総生産 (GDP) はこの20年で約5倍に。2030年までに、さらに2.5倍の増加が見込まれている。EU (欧州連合) や NAFTA (北米自由貿易協定) に経済規模こそ及ばないが、人口は約5・8億人と同様の域内組織として世界最大規模を誇る。

日本とASEAN 40年のつながり

この数年は、インド、アフリカ向けの輸出も拡大しているASEAN。資源も人材も豊富なこの地域は、域外の国々にとっても魅力的だ。中でも、地理的にも近い日本とのつながりは強く深い。現に、日本からASEAN地域への直接投資はこの7年で3倍とうなぎ上りだ。

しかし、こういったASEANと日本のつながりは、最近に始まったことではない。2013年は「日・ASEAN友好協力40周年」。長年にわたり、互いに助け、支え合っ

そして、未来へ

今、アジアの勢いがすごい。

都市部には高層ビルが立ち並び、道路には車やバイクがあふれている。

この数年、東南アジア諸国連合 (ASEAN) の国々を中心に、

そんな光景があちこちで見られるようになった。

そして彼らは、次の成長のステージへ。

“チーム・アジア”として日本とタッグを組み、一地域としてさらなる発展を目指す。

編集協力：日本大学生物資源科学部国際地域開発学科 朽木昭文教授

ASEAN 特集



10 ミャンマー

首都：ネーピードー
面積：68万km²
人口：6,400万人(2012年)
言語：ミャンマー語
宗教：仏教、キリスト教、イスラム教など
主要産業：農業
1人当たり国内総生産(GDP)：834ドル(2012年)
実質GDP成長率：5.0%(2012年)
ASEAN加盟年：1997年



9 タイ

首都：バンコク
面積：51万4,000km²
人口：6,700万人(2012年)
言語：タイ語
宗教：仏教、イスラム教
主要産業：製造業、農業
1人当たり国内総生産(GDP)：5,480ドル(2012年)
実質GDP成長率：6.5%(2012年)
ASEAN加盟年：1967年



8 カンボジア

首都：プノンペン
面積：18万km²
人口：1,490万人(2012年)
言語：カンボジア語
宗教：仏教、イスラム教
主要産業：農業、縫製業、建設業、観光業
1人当たり国内総生産(GDP)：946ドル(2012年)
実質GDP成長率：7.3%(2012年)
ASEAN加盟年：1999年



7 マレーシア

首都：クアラルンプール
面積：33万km²
人口：2,920万人(2012年)
言語：マレー語、中国語、タミール語、英語
宗教：イスラム教、仏教、儒教・道教、ヒンズー教、キリスト教など
主要産業：製造業、農林業、鉱業
1人当たり国内総生産(GDP)：1万381ドル(2012年)
実質GDP成長率：5.6%(2012年)
ASEAN加盟年：1967年



6 シンガポール

首都：なし
面積：716km²
人口：530万人(2012年)
言語：マレー語、英語、中国語、タミール語
宗教：仏教、イスラム教、キリスト教、道教、ヒンズー教
主要産業：製造業、商業、ビジネスサービス業、運輸・通信業、金融サービス業
1人当たり国内総生産(GDP)：5万1,709ドル(2012年)
実質GDP成長率：1.3%(2012年)
ASEAN加盟年：1967年



1 ラオス

首都：ビエンチャン
面積：24万km²
人口：660万人(2012年)
言語：ラオス語
宗教：仏教
主要産業：サービス業、農業、工業
1人当たり国内総生産(GDP)：1,399ドル(2012年)
実質GDP成長率：8.2%(2012年)
ASEAN加盟年：1997年



2 ベトナム

首都：ハノイ
面積：32万9,000km²
人口：8,900万人(2012年)
言語：ベトナム語
宗教：仏教、キリスト教、カオダイ教など
主要産業：農林水産業、鉱業、軽工業
1人当たり国内総生産(GDP)：1,596ドル(2012年)
実質GDP成長率：5.0%(2012年)
ASEAN加盟年：1995年



3 フィリピン

首都：マニラ
面積：29万9,000km²
人口：9,700万人(2012年)
言語：フィリピン語、英語
宗教：キリスト教、イスラム教
主要産業：農林水産業
1人当たり国内総生産(GDP)：2,587ドル(2012年)
実質GDP成長率：6.8%(2012年)
ASEAN加盟年：1967年



4 ブルネイ

首都：バンドルスリブガワン
面積：5,800km²
人口：41万2,000人(2012年)
言語：マレー語、英語、中国語
宗教：イスラム教、仏教、キリスト教など
主要産業：石油・天然ガス
1人当たり国内総生産(GDP)：4万1,127ドル(2012年)
実質GDP成長率：2.2%(2012年)
ASEAN加盟年：1984年



5 インドネシア

首都：ジャカルタ
面積：189万km²
人口：2億4,700万人(2012年)
言語：インドネシア語
宗教：イスラム教、キリスト教、ヒンズー教、仏教、儒教など
主要産業：製造業、農林水産業、鉱業
1人当たり国内総生産(GDP)：3,557ドル(2012年)
実質GDP成長率：6.2%(2012年)
ASEAN加盟年：1967年

さらなる発展に向けて 新たな挑戦へ

そして今、ASEANは、新たな局面に立たされている。

ASEANといっても一様ではない。ASEAN4と呼ばれるのが、インドネシア、タイ、フィリピン、マレーシア。この4カ国は著しい経済成長を経て、今はその発展過程ゆえの壁、いわゆる「中所得国のわな」に直面している。一方で、CLMVと分類されるカンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナムは、まだ他のASEAN諸国との所得格差が大きい。さらには、環境問題や高齢化

など日本にも通じる新たな課題に立ち向かっている国もある。これから一地域として、ASEANがさらなる発展のために歩むべき道とは。

「どの国も中所得国までは到達の道が開けましたが、高所得国になるためにはさらなる条件整備が必要で、消費の質の向上を目指し、ASEANへ消費産業に関する外資を導くことが突破口の一つ。そのための条件は、アジアで「人」が育ち、「文化センス」が向上することにあります」と日本大学の朽木昭文教授は話す。日本としても、長年ASEANに対して続けてきた橋や道路を造るインフラ整備に加え、人を、知を育む「ソフト面」の協力により重きを置くように。民間企業が力を発揮できるよ



日・ASEAN友好協力40周年

日本とASEANのつながりは、1973年に設立された日・ASEAN合成ゴムフォーラムが始まり。その交流開始から40周年に当たる2013年は、政治、経済、文化、青少年交流、観光など幅広い分野で記念交流事業を実施。12月14、15日には、東京で日・ASEAN特別首脳会議が行われる。



う、互いの強みを持ち寄り、今まで以上に力を合わせるべき時に来ている。2015年には域内の関税を撤廃し、ASEAN経済共同体として新たなスタートを切る。ASEANの成長の先にある未来に向けて、チーム・アジアの対等なパートナーとして、歩みを進めている。

40年のつながりを力に

東南アジア諸国連合(ASEAN)事務局長 **レ・ルオン・ミン**



ASEANと日本は、長年にわたり政治、経済、文化などさまざまな面で交流を続け、緊密な関係を築いてきました。2013年は「日・ASEAN友好協力40周年」。まさに節目の年です。

そして今、私たちは成長の過程で新たな課題に直面しています。例えば、域内の格差是正やASEAN経済共同体(AEC)創設。これらを実現するためには、日本の経験と

知見が不可欠です。これまでも日本の協力の下、産業を支える人材を育てる大学間ネットワークや、域内の連結性を高める海運ルートの整備などを実施し、地域全体としての成長につなげてきました。

今後は、これまで以上に日本と力を合わせ、環境問題、海上保安、感染症、テロといった地球規模課題の解決に貢献していきたいと考えています。12月には「日・ASEAN特別首

脳会議」が東京で開かれ、各国の代表が集まって今後の展望を議論します。私たちはその場で、日本との関係強化に向けた道しるべを示したいと思っています。

私が事務局長を務める間に、AEC創設とASEAN創設50周年という2大イベントがあります。ASEANとして世界に輝きを放ってほしい、その土台づくりに力を入れていきたいと考えています。



ホーチミン市内を行き交うバイク。渋滞緩和のため、日本などの協力によりインフラ整備が進められている



高層ビルの合間にある巨大マーケットには、昔ながらのベトナムの雰囲気が残る



ベトナム カンボジア
from VIET NAM & CAMBODIA

人がつなぐ知のネットワーク

アジアの人材はアジアの中で育てる。
ASEANのさらなる成長に求められる人づくり。
国の、そして地域の産業を支える人材の学び舎である大学で、
ASEANと日本のネットワークが広がっている。



変わりゆく街、
求められる知

ザー、ザー、ザー。

朝から降り続く雨。「雨期ももうすぐ終わりだよ」。人々はそう言うが、一向に止む様子はない。その激しい雨の間をすり抜けるかのように、幾重にもバイクが重なり、目の前を通り過ぎていく。その流れも、決して途切れることはない。

10月上旬、ベトナムの商業都市ホーチミンの街中は、今日も朝からにぎやかだ。前回訪れたのは約4年前、その発展ぶりは明らかだった。現地の

女性が身にまとうアオザイ、屋台に並ぶフォーや生春巻き、色鮮やかな雑貨……。そんな、典型的なベトナムの姿は今、大きな変化を遂げている。街中にそびえ立つ高層ビル、目抜き通りのブランドショップ、コンクリートで舗装された道路。数年後には地下鉄も開通予定だという。

日本からわずか6時間のところにある街。この地に向かう飛行機は、観光客に負けじと日本のビジネスマンでいっぱい。そう、ベ

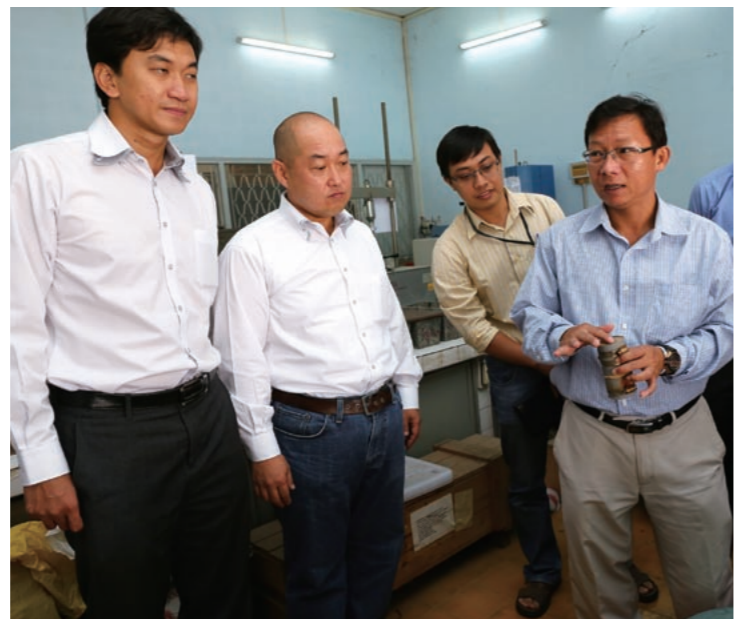
トナムは今、新たな市場を求める日本企業にとって、熱い「国」なのだ。

「ベトナムへの進出は、日本での投資セミナー参加がきっかけでした」

そう話すのは、サムシングホールディングス株式会社ホーチミン駐在員事務所の小林亨所長。地盤調査・地盤改良を行う同社がベトナムに進出したのは3年前。「最初の数年は先行投資という覚悟でした。日本の技術がそのままベトナムで使えるわけではない。コストの問題もありますし、我が社の技術をどう生かせるのか、地元と大学と連携して調査を進めているところです」。

そのパートナーが、ホーチミン市工科大学のチャン・グエン・ホアン・フン教授率いる研究チームだ。テーマは、水田のあぜの土質改良。この国の農業を支え、メコンデルタ地域の洪水対策にも活用できる可能性を秘める技術だ。海を超えて、東北大学もチームの一員として関わっており、「日本の技術とのマッチングを図る上で心強い」と小林所長は話す。

洪水から水田を守るため土質改良技術の開発に取り組むチャン教授(右端)と小林所長(左から2人目)。東北大学のサポートで日本の技術力との融合を図る



ASEANの産業人材を 育てるネットワーク

ベトナムと日本の大学、そして、日本企業。この連携を可能にしたのが、日本とASEANの大学が10年にわたって築き上げてきた大学間ネットワークだ。

きっかけは、1997年のアジア通貨危機だった。タイに端を発した通貨下落の余波はあつという間に近隣国に広がり、経済停滞という大きな影を落とした。「欧米

ベトナムの商業都市ホーチミンの市街地。近年の経済成長は著しく、新たな市場を求めて進出する日本企業も多い

写真(p10上を除く): 高橋智史(フォトジャーナリスト)

「日本の大学と組んでメリットがある」と思ってもらえるよう、私たちが

部生時代の同期」という馬場教授も、今年からホーチミン市工科大学との共同研究に参画している。

そして、その日野出教授とは、学

激にもなっています」と日野出教授は話す。

国内の理工系大学の中でも先駆けて、産業界との連携、海外の大学との交流に積極的に取り組んできた東京工業大学。「私の研究室でもASEAN地域の留学生が学んでいますが、とにかくみんなエネルギーが豊富です。自分が何のために研究しているのか、何を目標としているのか、目的意識がはっきりしている。日本の学生たちの刺激にもなっています」と日野出教授は話す。



プノンペン市内にあるカンボジア工科大学



プノンペン郊外の飲料メーカーとの打ち合わせに参加するホル講師(右)



「日本とASEANの大学をつなぐネットワークは貴重な財産。問題を共有し、それぞれの大学の強みを生かして解決していきたい」と、カンボジア文化・芸術省のプーン・サコナ大臣

※「アセアン工学系高等教育ネットワーク(ASEAN University Network/Southeast Asia Engineering Education Development Network)」の略称。

最も力を入れているのは、産業界との連携。「研究は研究室の中で終わってはいけない。社会に還元してこそ意味がある。産学連携の経験豊富な日本の大学に学びたい」と教授陣は意気込む。

今、ASEANと日本の大学が最も力を入れているのは、産業界との連携。「研究は研究室の中で終わってはいけない。社会に還元してこそ意味がある。産学連携の経験豊富な日本の大学に学びたい」と教授陣は意気込む。

国内の理工系大学の中でも先駆けて、産業界との連携、海外の大学との交流に積極的に取り組んできた東京工業大学。「私の研究室でもASEAN地域の留学生が学んでいますが、とにかくみんなエネルギーが豊富です。自分が何のために研究しているのか、何を目標としているのか、目的意識がはっきりしている。日本の学生たちの刺激にもなっています」と日野出教授は話す。

アジアで学び、アジアで生かす

隣国のカンボジアも例外ではない。首都プノンペンはホーチミン

から飛行機でわずか50分。あつという間だが、国境を越えると、やはり雰囲気は一変する。ホーチミンに比べるといくらか落ち着いた感じが、それでも交通量はこの数年で格段に増えた。いわゆる伝統的な市場を背に、大規模なショッピングセンターや、おしゃれなレストランも見える。

もちろん、ASEAN域内外の企業の進出も増えている。そしてこの国の産業を支える人材を育てているのがカンボジア工科大学だ。「SEEDNetは、ASEANの人づくりのプラットフォーム。日本で最先端の技術を学んだ学生たちが、見違えるように成長して帰ってくるのは頼もしい」とオム・ロムニー学長。彼自身も93

年から北見工業大学、北海道大学への留学経験があり、外のアジアで学ぶ意義を、身をもって感じている。

SEEDNetの博士号取得プログラムの一環で、静岡大学で学んだホル・シルヘン講師も同様に「最先端の技術だけでなく、協力的な精神、粘り強さなど、研究に対する姿勢に刺激を受けました」と語る。現在、地元の大手飲料メーカーとの工業用水に関する研究を、静岡大学時代の恩師と相談しながら進めている。

大学が人をつくり、そこで生み出された研究成果が社会に還元されていく。ASEANと日本の大学は、そんな未来を共に描き続けている。



「国は違えど、同じ研究者として私たちは“ファミリー”です。アジアの産業を活性化するために共に汗を流したい」とロムニー学長

顔と顔を突き合わせた共同研究

そしてこの日、ホーチミン市工科大学には、東京工業大学の日野出洋文教授(理工学研究科国際開発工学専攻)と馬場俊秀教授(総合理工学研究科化学環境学専攻)が訪れていた。それぞれの共同研究の進捗を確認するためだ。



エビの養殖池の水質管理に取り組むホーチミン市工科大学の研究者たち。フィールドワークは研究の基本だ



教室の外のスペースを使って実験に取り組むベトナムの学生

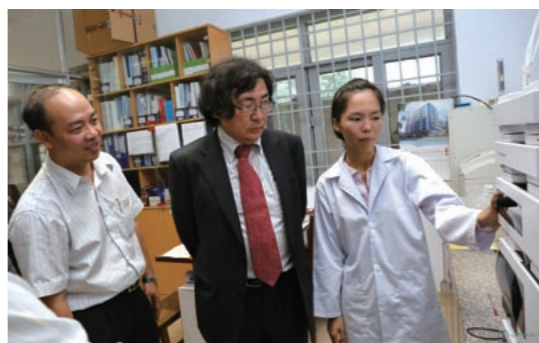


「学生たちにとって、日本への留学は大きな目標の一つになっています」と話すトゥアン副学長

人材も研究のノウハウも不足していましたが」とファン・デイン・トゥアン副学長は振り返る。

しかし、SEEDNetができてからは違う。日本や他のASEANの国で学位を取得した学生が教員となり、自国の大学の即戦力として働いているのだ。トゥアン副学長は「人と知の良い循環が起きている」と胸を張る。

その一人が、博士課程で東海大学に留学していたチャン・ゴク・ティン講師。「日本の大学の研究室にはいつも明かりがついていて、みんないつ寝ているのだろうか。国を代表して来ているのだから、自分もがんばらなければと背中を押された気分でした」。そんな彼の現在の研究パートナーは古巣の東海大学だ。ベトナムの主要輸出産品の一つ、エビの養殖池の水質検査システムの研究に汗を流している。



研究室で学生に機材の説明を受ける馬場教授(中央)。「これだけの熱意があれば、きっと研究成果にもつながるはず」

に頼ってばかりではいけない。アジアが一体となって、産業を育て、競争力を高めなければ」。

そんな思いが高まっていた時、手を挙げたのが日本だった。橋本龍太郎首相(当時)が「アジアの持続的・安定的な経済開発の実現のためには、産業界を活性化させる人材育成が重要」と強調。これを受けて小渕恵三首相(当時)が、「工

学系高等教育の人材育成」を政策として打ち出した。

工学系の人づくり。その最前線となるのは、やはり大学だ。そこで、2001年に誕生したのがAUN/SEEDNet※。ASEAN各国の工学系トップ大学26校、日本の大学14校がネットワークをつくり、域内間の修士・博士課程の留学プログラム、共同研究

などを通じて、相互交流を促進していくというものだ。

そして、そのメンバー校の一つがホーチミン市工科大学。市街地のけん轡をくぐり抜け、車を20分ほど走らせたところにキャンパスはある。「10年前までは、国外だけでなく、国内ですら大学間の交流がほとんどなかった。優秀な教員は欧米の大学に行ってしまう、



共同研究のパートナー企業を訪問するファン・ハ講師(左から2人目)と日野出教授(左端)。「この企業には卒業生も多く、産学連携もうまく進んでいるようですね」



マヒドン大学熱帯理学部で研究に取り組む研究者たち。「日本から技術を学びたい」という積極的な学生が多かった」と生田教授



報告会は、若手研究者にとって自身の成果を発表する貴重な機会

際科学技術協力 (SATREPS) ※を通じて、タイとの共同研究に取り組んできた。

タイ側のパートナーは、長年の交流があるタイ保健省医科学局国立衛生研究所 (NIH) と、熱帯感染症研究に力を入れるマヒドン大学熱帯医学部・熱帯理学部。NIHには、大阪大学の感染症研究の海外拠点として05年に「日本・タイ感染症共同研究センター」が設立され、研究はもちろん、両国の若手研究者の育成にも力を入れてきた。「海外とのつながりが強まる中、日本でもいつ熱帯感染症

成果を生み出した 人づくり

治療薬開発のカギは、ウイルスの増殖を抑える有効な抗体を見つけること。まずはタイの患者の血液から細胞を培養し、デング熱の抗体を作ることになった。

が広まるか分かりません。近年、病原体も各国の生物資源であるという考えが強まり、日本が熱帯感染症の病原体を使って研究するためには、その地域の研究者との協力が不可欠になりました」と生田教授は話す。日本の研究者は感染症研究の最前線に拠点を持ち、タイの研究者は最先端技術を持つ日本と共に研究できる。両者のメリットが合致し、共同研究が始まった。

しかし、最初はうまくいかなかった。「タイの研究者たちは、実験用マウスの血液から抗体を取り出す技術はありませんでした。しかしヒトの血液を扱うのは初めて。そこで英語版のマニュアルを渡したのですが、使ってくれませんでした。」「生田教授はそう振り返る。自分たちには自分たちのやり方がある。彼らはそう考えていたようだった。

新しい技術はマニュアル上では分からない。そこで大阪大学微生物病研究所の佐々木正大講師など、延べ約160人の専門家がタイへ飛び、直接指導することに。例えば、シャーレで細胞を培養するには、数日ごとに液を入れ替え、カビが生えないように温度を管理しなければならぬ。そういった基礎の積み重ねやコツが、人の命を救う源になるのだ。

さらに、抗体の解析方法など、

この成果を基に製薬会社との研究が順調に進めば、早くも5年後にはデング熱の治療薬が実用化する可能性が高い。「日本とタイが力を合わせた研究が薬の開発につながる。大きなやりがいを感じます」。病に苦しむことがない未来へ。その実現のために、タイはASEAN地域の新たな感染症対策に向け、一歩を踏み出した。



※JICAとJST(独立行政法人科学技術振興機構)が協働し、地球規模課題の解決のため、日本と開発途上国の研究者が共同研究を行う3~5年間の研究プログラム。

プロジェクトの最終報告に臨む生田教授(左から3番目)。治療薬の共同開発に向け、インドの製薬会社などと交渉を始める」と発表

タイ
from Thailand

光差す新薬作りへの道

日本では、病気になるたら薬を飲んで治すのが当たり前。しかし開発途上国には、治療薬がない病に苦しむ人々がいる。そこで始まったのが日本とタイの共同研究。両国の研究者が知識を共有し、新たな薬の開発に取り組む。



連携から生まれる Win-Winの関係

「顧みられない熱帯病」。熱帯地域で多数の感染者を抱えているにもかかわらず、世界から関心が向けられず、対策が遅れている病気の呼び名だ。

その代表的なものの一つが、デング熱。蚊が媒介するデングウイルスに感染すると、発熱や頭痛、関節痛、発疹などの症状が出る。東南アジア、南アジア、中南米などの熱帯地域で年間約5000万

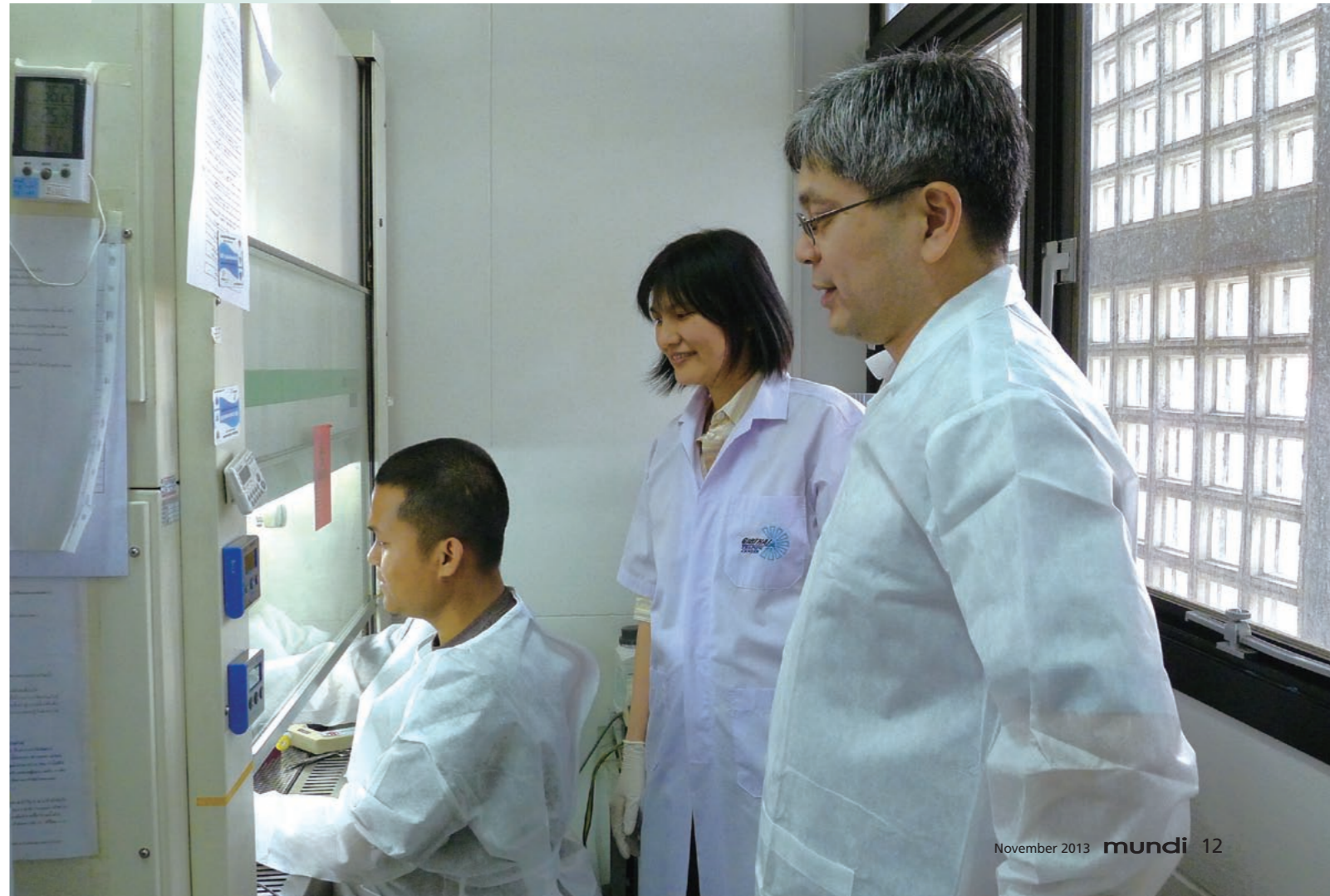
人が感染し、そのうち約25万人は重症に陥り、死に至ることもある。しかし、ワクチンも治療薬もない。感染したら水分を補給し、安静にするしかない。「蚊は水たまりや水槽などで繁殖するため、感染源を完全に断つのは難しい。一カ所で行えばすぐ広がってしまいます」。そう話すのは、大阪大学微生物病研究所の生田和良教授。感染症に国境はないのだ。

デング熱をはじめ、インフルエンザやボツリヌス中毒症など東南アジアで流行する感染症の治療薬を開発したい。生田教授らは2009年から地球規模課題対応国



日本の支援により、1984年にバンコク近郊に建設されたNIH

タイの若手研究者が来日し、大阪大学微生物病研究所の黒須剛助教が培養細胞を使った検査方法を指導。両国の若手研究者のネットワークづくりにつながった



場で臨機応変に対応することで、より良いサービスにつながる。個々の現場で顧客と共感して得た暗黙知と組織内外にある形式知を、彼らを中心として総合することで、現場とつながった経営ができるのだ。

この理論は、民間企業はもちろん、国づくりにも役立つはず。そう捉えているのがASEAN諸国だ。トップが決めた政策が思うような結果を生まないことも多い。それは、各国の行政組織にミドルマネジャーが少なく、現場の知が政策に十分に生かされていないからだ。

そこで2004年から、知識創造理論を学び、その実践の現場を見る研修が日本で実施されている。ASEAN諸国の行政組織などから派遣された研修員が、野中教授による直々の講義はもちろん、民間企業や地方自治体なども訪問する。その一例が、コンビニエンスストアを経営する株式会社セブンイレブン・ジャパン。天候や地域のイベントなどを考慮し、各店舗が個々の商品を管理し、店長が発注を決めるシステムを導入している同社。「日本の現場で話を聞いたのは大きな収穫。情報を共有する場、気づきなど、自国でも生かしたい」と研修員からも好評だった。



日本での研修に参加し、セブンイレブンの店舗を視察する東南アジアの研修員。民間の知にヒントがある

行政が目指すべきモデルを探す

日本での研修をきっかけに、各地の行政組織にも広まり始めた知識創造理論。次のステップは、理論の実践だ。

すでにASEAN諸国では、現場の人々が培った暗黙知を共有する場をつくり、社会の課題解決を目指すリーダーがいる。彼らの共通項を探し、各国の事情に合った組織運営のモデルを導き出せないか。そこで、政策研究大学院大学(GRIPS)と一橋大学、JICAが、各国の研究機関と共同研究に乗り出した。

例えば、他国に先駆け、幹部公務員の養成プログラムに知識創造理論を取り入れているベトナム。研究対象の一つは、世界遺産に登録されたベトナムのホイアン市だ。市のトップに当たるケン・



今年6月に日本で開かれたワークショップで、知識経営について講義する野中教授。インドネシア、タイ、ミャンマーなど5カ国から公務員養成機関や学術機関の職員が参加した

改革のカギは日本企業の知にあり!?

本が世界に誇るものづくり。それを支えるのは、例えば小さな町工場の職人たちだ。彼らには現場で長年培ってきた熟練の技術がある。そうした個人の経験や気付き、匠の技などを「暗黙知」と呼ぶ。しかし、それを共有しなければ個人の中に留まったまま。そこでそれらを言葉として表現したのが「形式知」。製造工程や接客のコツなどをまとめたマニュアルが良い例だ。

この二つの知識を組み合わせ、新しい知識を創造してこそ、組織はイノベーションを起こし続けられる。これが、世界的に著名な野中郁次郎一橋大学名誉教授が提唱した「知識創造理論」の基本だ。この理論では、ホンダやトヨタなどの民間企業が日本の高度経済成長をけん引した理由は、知識創造



野中教授共著の『Managing Flow』(2008年)はベトナム語に翻訳されるほど支持されている

を進める力「実践知」を持つリーダーにある、と説明する。「日本企業の強みは、トップと現場をつなぐミドルマネジャーの実践知にあります。例えば、クロネコヤマトのセルスドライバー、日本一の旅館・加賀屋の仲居さん、資生堂のビューティーコンサルタント。直接顧客と接する彼らこそ、顧客の本当のニーズも知っている重要な存在です」と野中教授は話す。ミドルマネジャーが現



共産党幹部のトー・フィア氏と会談する野中教授(左)。ベトナム側からの関心も高い

国を支える「知」を生む力

一人一人の経験や知恵が集まれば、組織も国も変わる。日本でも実践されてきたこの理論を国づくりに生かしたいと、ASEAN諸国から注目が集まっている。

ス・ホイアン市共産党書記長のリーダーシップの下、組織全体で古い街並みを守りながら観光振興に力を入れた結果、世界中からの観光客が増加。市民の声を聞き、都市づくりに生かす書記長は、まさに実践知のリーダーだ。

研究に参加する一橋大学大学院国際企業戦略研究科の川田英樹講師は、この8月、研究のパートナーであるホーチミン国家政治行政学院(HCMA)の職員と共に調査のため同市を訪れた。「公務員

養成機関であるHCMAの職員が、自ら現場に足を運ぶことに意味がある。成功例としてホイアン市の組織運営を学び、良い点を行政官の育成に生かせるからです」と振り返る。

急激な経済成長を遂げるASEAN諸国は、高齢化や環境問題など、より複雑化する課題と向き合わなくてはならない。それに立ち向かえる人づくりを、日本の発展を支えてきたこの理論が変えていくはずだ。



[上]ランタンがとどるホイアン市の旧市街。景観を守るためバイクの乗り入れを禁止するなど、現場の声を生かした政策を進め、観光都市として成功を収めている
[下]市役所に当たるホイアン市人民委員会をHCMAの職員が訪れ、都市づくりの過程でのリーダーや行政の役割についてインタビュー

7月下旬、来日最終日にエルワンさんは21年ぶりに沼津市に向かった。「私の再会を喜んでくれるだろうか」。正直不安もあった。ホストファミリーの英一さんは数年前に亡くなり、ホ

ついに夢がかなった 感動の再会

当時、ブルネイ産業一次資源省の農業化学研究員だったエルワンさん。東京、広島、静岡で約1カ月間、公害問題や廃棄物管理について学んだ後、静岡でホームステイをするというプログラムだった。そのアレンジをした沼津国際交流協会とJICAが連携し、必死でホストファミリーを探した結果、ついに探し当てた。今も静岡で暮らす鈴木さんファミリーだ。

係者たちの心を動かした。「日本を思い続けてくれたエルワンさんの思いに応えたい!」と、一大プロジェクトが始まった。過去の記録をたどっていくと、90年代にJICAがブルネイを含むASEAN諸国を対象に「青年招へい事業※」を行っていたことが分かった。そして、倉庫に眠っていた名簿の中からエルワンさんの名前を発見。1990年ではなく、1992年に来日していたことも分かった。



エルワンさんが大事に残していたホームステイ時の写真が、重要な手掛かりとなった



ホームステイ当時も来た駿河湾の海岸沿いで再会を喜ぶエルワンさんと博子さん

つながる絆

21年ぶりの再会

21年前、日本でお世話になったホストファミリーに会いたい。2013年のASEAN議長国、ブルネイのエルワン外務貿易省次官が抱き続けてきた思いが、この夏、ついにかなった。

ニッポンの ホストファミリーに 会いたい

2013年夏、日本の外務省の仕事で来日することになったブルネイのエルワン外務貿易省次官。実は彼には、長年抱き続けてきたある思いがあった。今回、日本の地を踏むのは初めてではない。彼にとっての「ニッポン」は、ずっと特別な存在だった。21年前、まだ20代の若手行政官だったエルワンさんはJICAの研修で来日。静岡県でホームステイも体験した。あの時のホストファミリーに



鈴木さんを探すカギとなった沼津ナンバーの写真

ストマザーの博子さんも現在闘病中だと知ったからだ。しかし、そんな不安は無用だった。

「エルワン!!」

到着するなり大きな声を上げて迎えてくれたのは、あのころと変わらない博子さんの笑顔だった。「初めて受け入れたホームステイだったのでよく覚えていますよ」。当時エルワンさんが宿泊していた部屋で、思い出話に花を咲かせた。

英一さんと富士山の五合目まで行ったこと、魚市場でマグロの大きさに驚いたこと、茶畑を見学したこと。エルワンさんが1男4女の父になり、外務貿易省次官を務め、

「ダトウ」という称号で呼ばれていることを聞き、「ブルネイの息子」がこんなに立派になって本当にうれし。

エルワンが来てくれて元気になったわ」と博子さんは笑顔を見せた。

博子さんと共に、当時も訪れた海岸沿いの散歩道や沼津港を散策したエルワンさん。「博子さんは21年前も今もパワフルな人。再会できて本当に良かった」と喜びをかみしめていた。一度途切れたかに思えた絆は、しっかりと2人をつないでいた。

エルワンさんはブルネイの対ASEAN外交の責任者。ASEANと日本の懸け橋として、日本のホストマザーのことを思いながら、これからもその絆を深めていってほしい。



当時、鈴木さんは沼津市国際交流協会の会報にエルワンさんとの思い出をつづっていた

※青年招へい事業とは?

開発途上国の将来有望な若手行政官を日本に招き、教育、保健医療、農業など専門分野の知見を深めるとともに、同じ分野に携わる日本の青年との交流を通じて相互理解を深める研修プログラム。ASEAN諸国を対象に1984年に始まり、アジア、大洋州、アフリカ、中央アジア、中東、中南米にも対象を広げ、2007年3月までに約3万1,500人が来日。現在は18日間の研修に重点を置いた「青年研修事業」に引き継がれている。

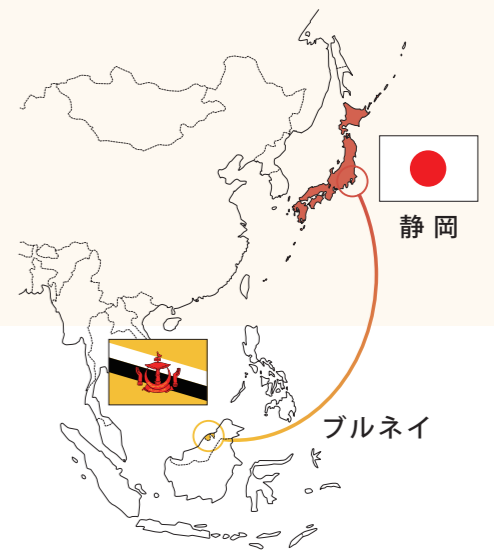


エルワンさんの健康を祈り、博子さん直筆の書道の作品をプレゼント

会って、もう一度、お礼を言いたい。これが彼の願いだった。「帰国してからも何度か連絡を取ろうとしたのですが、うまくいきませんでした。静岡で過ごした時間は、私にとってかけがえのないもの。ずっと心に引っかかっていました。今回の来日の機会に、なんとか探し出して会いたい。エルワンさんはこれが最後のチャンスだと思っていました。

しかし手掛かりは「静岡」「1990年」という断片的な情報。あとは、沼津ナンバーの車やホストファミリーが写った写真だけだった。

沼津市内の懐かしい場所を歩きながら、思い出話がいつまでも続く





ベンゲット州は畑の面積が小さく急峻な地形。機械化は難しく、農作業はほぼ人の手で
行われている

フィリピンでは、収穫した野菜は見た目にかまわず、どさっとトラックに積んで
しまう。流通・販売は、各農家が個別に仲買人に頼っている



国際協力の担い手たち

公益社団法人国際農業者交流協会

土をつくり、人をつくる

国際的な“農業者”の育成を目指す公益社団法人国際農業者交流協会。
その舞台は日本だけではない。
フィリピンの農家が安全でおいしい野菜を育てられるよう、
有機農業の普及に取り組んでいる。



農薬漬けの 野菜作りからの脱却

朝5時。農家の朝は早い。畑に着くと、もうレタスの収穫が始まっていた。長野県東部に位置する南佐久郡佐久穂町。高原野菜の一大産地だ。

「こうやってきれいに詰めるんですよ。手早くね！」
切り口が真っすぐになるよう、レタスを一つ一つ包丁で丁寧に刈り取る。土がついた葉をはがし、形を整えながらカゴに入れていく。この日の収穫は2000個。一息ついたころには、もう6時になっていた。

「レタス一個の見た目に、こんなに気を使うなんて！」と目を丸くする一団がいた。彼らは、公益社団法人国際農業者交流協会（J A E C）の研修に参加するため、フィリピンから来日した研修員たち。農業省の職員や州議員から、地方自治体の町長、農業技術師まで、その顔ぶれは多彩だ。

J A E Cは国際的な農業の担い手を育てるため、1952年からアメリカなどの大規模農業地へ日本の若手農業者を派遣。67年からは国際協力の一環として、中南米やアジアの農業関係者を日本に招き、農業技術を教える研修も実施している。

フィリピンとも長年の縁があり、2007年からはJICA草の根技術協力事業を通じて、農業生産性の向上を支援している。その場所はロンソン島北

部、人口約35万人のベンゲット州。標高が高く山がちで、南佐久郡と同じように高原野菜の栽培が盛ん。長年培ってきた経験を共有できると考えたからだ。

「首都マニラで消費される野菜の6割はベンゲット産といわれますが、近年、生産性の低下が問題になっていたので」と、プロジェクトリーダーを務めるJ A E C業務部長の坂元良二さんは話す。原因は化学肥料の使い過ぎで土が疲弊していること。病気も発生しやすくなり、農薬を大量に使用せざるを得ないという悪循環に陥っていたのだ。

現状を変えるには 戦略を持つ

そこでJ A E Cが導入を進めてきたのが有機農業。そのキーパーソンが、南佐久郡で30年以上農業を営んできた有機農業のエキスパート、横森正樹さんだ。この地で農業を続けることができた恩返しをしたいと、60歳を過ぎてからは講演などで日本全国を飛び回り、フィリピンにも足しげく通う。

「ベンゲットでの課題は、生産性の低さに加え、農作物を仲買人に買ったたかされてしまうこと。でも、生産から流通、販売まで、戦略を持って取り組めば、農業はもうかるビジネスのはずです」と横森さんは話す。今から約40年前、J A E Cの研修生としてアメリカで農業経営を学んだ彼の理念は、「農家は経営者であるべき」だ。



室温5度に保たれた冷蔵庫で出荷を待つ野菜。こうした設備にもみんな興味津々だ



「直販だからこそ、見た目の美しさも付加価値になる」と話す横森さん(左から2人目)に収穫方法を学ぶフィリピンの研修員たち

まず横森さんらが伝えたのが、化学肥料だけに頼らずに、土を元気にする方法。それが、野菜くずや家庭からの生ごみで作った堆肥の他、炭を焼く過程で出る煙を冷やした木酢液を活用する有機農業だ。木酢液は堆肥の発酵を早め、微生物の働きを活性化させる効果を持つ。化学肥料ほどコストもかからず、何より土が生まれ変わって野菜がおいしくなる。横森さんはこの農法を長年続け、彼が作る野菜の品質の良さは高く評価されている。

今回の研修でも、南佐久郡にある炭・木酢液施設や堆肥作りセンターなどを見学。研修員たちからは次々と質問が上ががり、知識を吸収したいという意欲を強く感じた。ラ・トリニダッド町長のエドナ・タバングさんは「このまま化学肥料を使い続けると、いつか農業ができなくなる。そんな危機感があります。私の町では6年前から、横森さんに教えてもらいながら堆肥作りの施設を建て、有機農業を推進してきました」と話す。この町から始まった有機農業は、ベンゲット州全域、さらには他の州にも広がっている。

そして次の挑戦



炭焼きをフィリピンでも実践。炭も土壌の改良に役立つことを伝えた



木酢液は土壌改良の他、堆肥作りや虫よけにも使われる

は、付加価値のついた商品はどう効率的に販売するか。横森さんは中間業者を通さず、独自のルートを開拓して大都市のスーパーに直接販売している。新鮮で高品質な野菜をニーズに応じて提供するこの仕組みに賛同し、契約先が横森さんの出荷センターまで必要な量を取りに来る。農業省のマリア・グアダルペさんは、「横森さんからたくさん新しい発想を学ぶことができた。これをフィリピンでの流通・販売の改善に生かしたい」と話してくれた。

フィリピンの人々自身の力で農業を変える。農家、そして彼らを支えるリーダーが日本の農家の経験に学び、育っている。

「民間連携ボランティア」

株式会社サガミチェーン

本間 洋平

Honma Yohei

海外出店に向け、
JICAボランティアを活用

カツオだしの香ばしい香りに誘われて、そば屋の前を通るとつい足を止めてしまう。そんな人も多いのではないだろうか。「就職活動で疲れていた時、いつ食べてもなぜかホッとするそばの味に魅了されました。食を通じて、多くの人を幸せにできたらと思っただけです」。そう話すのは本間洋平さん。東海地方を中心に、そばやうどんなど和食種類のレストランを展開する株式会社サガミチェーンの社員だ。

本間さんは入社1年目から店舗に配属され、だし取り、麺打ち、接客など現場の最前線で活躍。3年目に

「和食の力でアジアを元気にしたい」

大都市に若者が流れ、過疎化が進むタイ中南部のチャチュンサオ県。本間洋平さんはこの地の観光業を盛り上げるため、現地の人たちと和食の調理と販売に取り組んでいる。

JICA Volunteer Story

PROFILE

1985年埼玉県出身。大学卒業後、株式会社サガミチェーンに就職。2013年3月から、民間連携ボランティア(コミュニティー開発)としてタイで活動中。



「タイ流」の和食の作り方について、100年市場の人たちと話し合う本間さん(中央)



は店舗の主任を任せられ、仕事も板についてきた。

そんなある日、一通の社内メールが届いた。「開発途上国でボランティア活動をする社員を募集します」。

この数年、海外進出に力を入れ、すでに中国・上海に店舗を構えるサガミチェーン。次は、タイやインドネシアなどへの出店を検討していたタイミンゲだった。現地の文化や生活習慣に詳しく、語学力やコミュニケーション力を備えた人材を育てたい。JICAの民間連携ボランティア制度※を活用して、青年海外協力隊として社員を途上国に派遣することにしたのだ。

本間さんはすぐさま手を挙げた。「海外でも通用する人間になって、会社を活気づけたい」。大学時代に、日本は食料や資源の多くを途上国に頼っていることを知り、実は国際協力に憧れを抱いていた。

現地のニーズに合った和食を開発

そうして向かったのがタイの中南部、チャチュンサオ県テパラート町。首都バンコクなどの大都市に出稼ぎに行く若者が多く、急速に過疎化が進んでいる。町役場に赴任した本間さんは、この地を活気づけるため観光振興を託された。そこで目を付けたのが、町の中心部にあるクローンスアン100年市場。その名の通り100年以上の歴史を持つ市場で、半世紀以上続く有名店もあり、趣のある雰囲気がある。観光地として大きなポテンシャルを秘めているが、いかにせん、この町以外の人に知られていない。

「海外からの観光客を集めるアイデアはないかな?」。町役場の同僚に聞かれ、本間さんが提案したのは、なんと地元食材を使った「和食」。自分のこれまでの経験を最も生かせると思ったからだ。これには、「話題づくりにもってこいだ」「日本人も興味を持ってく



a.雑貨、食品、電化製品、漢方薬などを扱うお店が軒を連ねる100年市場
b.天ぷらの揚げ方を指導。本場仕込みの手際を興味津々で見つめる人々
c.町役場の同僚たち。いつも笑顔で本間さんを励ましてくれる大切な仲間だ
d.日本人観光客を想定し、接客に必要な日本語も教えている

れるかもしれない」と同僚たちも大賛成。100年市場で店を出す人たちに一品料理を教えて、販売してもらうことにした。

そこで本間さんは料理教室を開催することに。しかし準備段階で問題が発生した。和食を作ろうにも、ここはタイ。食材は日本と形や味が違うものも多く、天ぷら用の鍋など調理用具もそろわない。

不安を覚えながら迎えた料理教室の当日。100年市場の人たちは「日本のおいしい料理を作りたい」と意欲満々。いざ、試作品として天ぷらやたこ焼きを作ってみると…。結果は案の定、思うような味が出せずに終わった。和食店で働いてきたプライドはずたずた。肩を落とさずにはいられなかった。

みんなも期待を裏切られ、さぞがっかりかと思いきや、「日本じゃないから仕方ない!」と笑顔で一蹴。「どうしたらうまく作れるか」を話し合い始めた。「なんでも楽しくやるのがタイ流。肩の力を抜いて、一緒に解決策を見つけていこうと思うようになりました」。本間さんにも笑顔が戻ってきた。

その後も料理教室は継続。和食をベースに現地の食材や味覚を加えた試作品が何種類も作られた。中でも、タコの代わりにウインナーを入れた「タイ流たこ焼き」は「おいしい!」と大好評。新商品として店頭にも並び目も近く、100年市場に新しい風が吹き始めた。

活動期間は残り半年。今の目標は、この町に一人でも多くの観光客に来てもらうこと。そして帰国後の活躍も楽しみだ。サガミチェーン管理・統合推進部の三谷正和次長は「タイが『第二の故郷』と言えるくらい現地に入り込み、人脈を広げてきてほしい。将来は、タイをはじめASEAN地域への出店を引っ張ってもらいたい」とエールを送る。本間さんも「タイと会社の懸け橋になりたい」と目を輝かせ、日々奮闘している。

※民間企業から社員をJICAボランティアとして開発途上国に派遣し、企業のグローバル人材の育成に貢献する制度。各企業のニーズに合わせて受入国、期間、職種などをアレンジできる。



世界地図を見ながらASEANの国について勉強

世界とつながる 教室

セミナールームから 世界を知ろう

「ベトナムではどうやってごはんを食べるんですか？」

「私たちも箸を使うんですよ」

「えー、日本だけだと思ってた！」

夏休みの真ただ中、JICA北海道（札幌）のセミナールームに子どもたちの元気な声が響き渡る。この日集まったのは、札幌近郊の小学生29人。北海道とはいえ、猛暑の影響を受けて30度超えのこの日。しかし、そんな暑さも吹き飛ばす熱いイベントが行われた。

その名も「ジャイカで自由研究やっちゃおう」。夏休みの宿題を、国際協力に触れながら終わらせてしまおうという企画。テーマは、日本とも長年のつながりがある、ASEANだ。「学校の先生が教えてくれたの」「お母さんがインターネットで見つけて」。子どもたちは満面の笑みで、これから始まる。おもしろいこと、に期待をふくらませている。

1時間目は社会の時間。「皆さん、ASEANを知っていますか？」。スライド

国際協力で 自由研究やっちゃおう！

夏休みの自由研究、一体何をしたらいいのか分からない…。

小学生のころ、2学期直前になって慌てた経験はないだろうか。

そんな悩みを吹き飛ばしてくれるイベントが、北海道で行われた。

切り。「どんな遊びがはやってるの？」
「どんな食べ物が一番人気？」「日本と違うルールはある？」。日本から約3600キロ離れた国に思いをはせ、質問が飛び交っていた。

ベトナムの楽器を みんなで作ろう

部屋の後ろには、この日のためにそろえたアジアの楽器がいっぱい。自分の体より大きなものもあれば、手の平サイズのものもある。「こんなに大きい楽器を見たの初めて！キレイな音が出るんだね」。札幌市立平和通小学校の山口真奈美ちゃん（5年生）らは、休憩時間にも楽しそうに楽器を演奏していた。

そして2時間目、いよいよここからが自由研究の本番だ。「みんなでベトナムに昔から伝わる楽器、トルン、を作りましょう！」。トルンは数本の竹を組み合わせた打楽器。ベトナム中部の民族に古くから伝わるものだ。そんな伝統楽器を、なんと今日は、自分たちで作ってしまおうというのだ。材料は、クラフト紙、ストロー、ハンガー、ひも。身近に簡単に手に入るものばかりだ。

まずは、竹作り。大きなクラフト紙を、みんなで協力して棒状に丸めていく。「端がずれないように真つすぐにね！」。声を掛け合いながら、ゆっくりゆっくりと慎重に進めていく。完成すると、どの子の身長も優に超える高さになった。これはいろいろな長さに切って、穴を開けてひもを通していく。「日本にはない楽器だし、友だちにも自慢できる。どんな音が出るか楽しみ！」。平和通小学校の曽我



丸めたクラフト紙を棒状に切って、長い順にひもでつなげていく。「うーん、穴が小さくて通らない！」

一面に大きな地図が映し出される。「この10カ国がASEANのメンバーです」。

先生役を務めるのは、現役の小学校教員でJICA北海道で研修中の東峰宏紀さんだ。「今日は北海道大学で勉強しているベトナム人留学生フォンさんに来てもらいました。子どもたちが興味津々でフォンさんに目を向ける。

まずは彼女の母国ベトナムについて、インターネットを使いながら勉強。面積、人口、言語、首都…。ワークシートの項目を一つ一つ埋めていく。「首都はハノイ？場所は？」。「面積は一、十、百、千」。グループに分かれて奮闘する子どもたちの姿を、付き添いのお母さんたちが目を細めて見守る。「貧しい国の子どもたちをテレビで見て、娘が興味を持ったようです。世界のことを学べるチャンスを探していて、JICAのホームページにたどり着いたんです」。札幌市立札幌小学校に通う渡辺恩彩ちゃん（6年生）、恩花ちゃん（4年生）姉妹のお母さんはそう話してくれた。

続いて質問タイム。フォンさんから現地の話が聞けるとあって、みんな大張り



完成したトルン。「これで夏休みの自由研究はバッチリ！」



手作りの楽器の材料はクラフト紙。みんなで協力して丸めていく



インドネシアの打楽器「アングルン」の演奏にも挑戦。上手にできました！





インドネシアの物流を支えるジャカルタの港の視察に同行する樋口さん(右から3人目)

現場での経験を生かし ASEANのさらなる発展に貢献したい

ASEANなどへの協力を担当するJICA東南アジア・大洋州部。樋口さんはラオスの教育支援やインドネシアのインフラ整備を手掛けた経験を生かし、現場の支援が草の根の人々に確実に届くよう奮闘している。

教員志望だった 大学時代

子どものころからの夢である教師を目指し、教育学を専攻した大学時代。高校生の時に読んだ世界の食事情に迫ったルポタージュの影響で、貧困に苦しむ開発途上国の人々の生活にも興味を持っていました。そんな中、JICAの仕事を経験する合宿セミナーがあると聞いて参加することに。途上国の人々を対象にした研修の企画に取り組み、日本のどこでどんなことを学んでもらうか、他の参加者と力を合わせ、一からその内容を考えました。これをきっかけに、世界を相手にしたスケールが大きい仕事に魅力を感じ、国際協力を仕事にしたいと思い始めたのです。

そこで、今まで学んできた教育分野ではどんな協力ができるのかを見つけたいと大学院に進学。教育は生きていく上で欠かせないもの。学校に行けない途上国の子どもたちに教育の機会を与え、その国の発展に貢献できる仕事がしたいと感じるようになりました。

仕事の流儀を 身に付ける

2年目の人間開発部では、東南アジアの基礎教育分野を任せられました。その中でも力を入れたのがラオス。ASEANの中でも経済成長が遅れ、子どもたちの就学率も低

かったからです。

地方の村に行ってみると、学校といつてもぼろぼろの黒板が一つあるだけの掘っ立て小屋。子どもたちが適切な環境で思う存分学べるよう、親と教員が協力して授業の改善や学校の運営に携わることができるよう組みづくりを始めました。

しかし、全てがうまくいったわけではありませんでした。どう教育の質を高めるかについて、日本人専門家や現地関係者と意見が対立することもしばしば。「人の意見をもっと聞きなさい」と当時の上司にも怒られました。専門の教育分野ということもあり、周りが見えていなかったのかもしれませんが、それからは、いかに周りの人と協力して現地のニーズに応えていくかが自分の課題となりました。

そして転機となったのが、インドネシア事務所でインフラ整備の事業を担当した時です。初めての分野で分からないことも多かったのですが、周りには交通の専門家やインフラ支援に精通した先輩方がいました。アドバイスをもらったり、励ましてもらいながら仕事をすするうちに、いろいろな人と協力してこそ、国際協力なのだと感じました。

当時から首都のジャカルタでは交通渋滞が深刻な問題でしたが、「大規模な整備をしなくても、道路の停止線やバス停の位置を変えるだけで状況は改善する」という道路建設の専門家の意見を聞き、このアイデア



JICA東南アジア・大洋州部
東南アジア第二課
調査役

樋口 創
HIGUCHI Hajime

大学院卒業後、2005年にJICAに就職。無償資金協力部(当時)、人間開発部、地球ひろば、インドネシア事務所を経て、2013年8月から現職。

ラオス支援の 戦略をつくる

を広めたいとセミナーを開くことに。先輩と相談しながらプレゼンテーションの練習を重ね、本番では150人近い関係者を前に発表。行政や企業の方々から高い関心を得ることができました。

現在の東南アジア・大洋州部では、再びラオスを担当しています。またラオスの人々と一緒に仕事ができることあってやりがいを感じる日々です。

今の私の役割は、プロジェクトが効果的に実施されるよう、予算を割り振ったり、支援計画を立案したりと、第一線で活躍する人たちが働きやすい環境をつくること。予期せぬトラブルが発生することも多いのですが、教育支援やインフラ整備の現場での経験を生かして対応しています。

今後ますます成長が期待されるASEAN。その一員であるラオスはもちろん、ASEAN全体のさらなる発展に貢献できるように、日々業務に励んでいきたいと思っています。



マラッカ・シンガポール海峡を通る船の安全を守るスタッフたちと

「グローバルフェスタJAPAN2013」開催

01



「日本の国際協力がよく分かる!」とJICAブースには大勢の人が訪れた

10月5、6日、東京・日比谷公園で「グローバルフェスタJAPAN2013」(外務省、NPO法人国際協力NGOセンター、JICA共催)が開催されました。今年で23回目を迎える国内最大級の国際協力イベントに、2日間で約7万8000人が来場。「見つけよう!世界とつながるあなたのトビラ」をテーマに、国際機関や大使館、NGO、民間企業など約250の団体が、ブース出展、ワークショップ、料理やフェアトレード商品の販売などを通して、世界とのつながりを紹介しました。

JICAもブースを出展し、国際協力を身近に感じてもらえるようプロジェクトを紹介するパネルを展示したり、世界の民芸品がもらえるクイズラリーなどを実施しました。連日大好評で、2日間で約1000人も人が訪れました。

また、日本が開発途上国で実施する国際協力に関する質問にJICA職員が答える「JICAfile(ジャイカファイル)」を設置。国際協力を仕事にしたい人から、ボランティアとして関わりたい人まで、さまざまな質問が飛び交っていました。

メインステージで行われたイベントも大盛況でした。5日には、「なんとかしなきゃ!プロジェクト」著名人メンバーのさかなクンが登場。今年5月に訪れたアフリカ西部のセネガルで魚市場や漁を視察した様子や、現地でカキの養殖を支援する日本人専門家の活躍ぶりなどを報告しました。続いて行われたのは、日本の国際協力を紹介するテレビ番組『佐藤隆太の地球元気!』に出演中の俳優・佐藤隆太さんのトークショー。今年7月に訪れたインドネシアで出会った開発コンサルタント、青年海外協力隊員、大学の研究者などの取り組みについての感想を披露しました。

6日に行われた「地球のステージ」つながる日本とアフリカ」では、医師の桑山紀彦さんが歌・音楽・映像を織り交ぜながらアフリカを紹介。今年の夏に国際協力レポーターとしてルワンダを訪れた宮坂真弓さんらとのトークセッションもあり、ルワンダの現状や課題、その解決に取り組むJICAボランティアの活躍ぶりなどを報告しました。

今年も大盛況だったグローバルフェスタJAPAN。JICAは今後もこのようなイベントを通じて、国際協力の情報を分かりやすく発信していきます。



イラストを描きながら国際協力の大切さを伝えるさかなクン。会場は大盛り上がり

バングラデシュ全国で縫製工場の耐震を強化

02



覚書の署名式に参加した関係者たち

10月3日、JICAはバングラデシュの縫製工場の安全性を高める支援を進めるため、バングラデシュ縫製品製造業・輸出業協会などを含む5団体と覚書を交わしました。

バングラデシュの縫製産業は、貧困層を中心とする約400万人の雇用を生み出し、全輸出収入の8割を占め、同国経済の根幹を支えています。しかし2013年4月、縫製工場が入るテナントビルが崩落し、1100人以上もの犠牲者が出ました。この事故は安全な労働環境や待遇改善を求めるデモや暴動に発展し、社会不安につながりました。

JICAは他国に先駆け、全国に約4000あるといわれる縫製工場の耐震化や建て替えの支援に取り組むことになりました。これはJICA専門家の指導を受けた技術者が建物の強度を診断し、その結果を受けて、建物の所有者が改修工事を希望すれば必要な資金を融資するというもの。本事業を通してJICAは、バングラデシュの人々の労働環境の改善、そして着実な経済発展に貢献していきます。

第9回「JICA理事長表彰」表彰式を開催

03



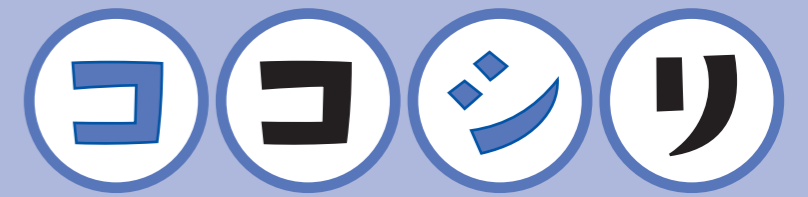
表彰式参加者と田中理事長(前列左から4人目)

10月7日、開発途上国の人材育成や社会発展に尽力した事業・個人団体に贈る第9回「JICA理事長表彰」の表彰式が行われました。

田中明彦JICA理事長は冒頭のあいさつで「環境やエネルギー、少子高齢化など、途上国と日本が抱える課題には共通点が多い。日本の民間企業、大学、地方自治体、市民社会などと幅広く連携し、日本と相手国の知見を結集して課題解決に取り組むことが大切」と述べました。

「JICA理事長賞」の個人部門では、日本の製造業の経営手法を教授し、インドの経営者の育成に尽力した司馬正次筑波大学名誉教授、エチオピア産の皮革製品の製造・販売を手掛け、現地の雇用創出や人材育成に貢献した青年海外協力隊OGの鮫島弘子さんの2人が受賞しました。

事業部門では、株式会社アルメックVPI他共同企業体と北海道旭川市が実施したモンゴル・ウランバートル市の都市再開発、沖縄県宮古島市がサモアで取り組んだ水資源保全対策・浄水処理を含む5事業が受賞しました。



「ココが知りたい」。国際協力に関係する
いろんなトピックを分かりやすく解説します!

2 011年3月以降、反体制派と政府軍との間で衝突が続くシリア。これまでに死者は約10万人を超え、周辺国に逃れた難民は約200万人、国内で避難生活を送る国内避難民は約425万人に達している。

安倍総理は国連総会の一般討論演説で、「罪のない市民が犠牲となり続ける状況に、怒りを覚えざるを得ない。この先に厳しい冬を控え、難民たちの絶望が増す今、日本はシリアとその周辺国に対して約60億円の人道支援を実施する」と表明した。具体的には、まずは国際機関を通じて約28億円の支援を行い、難民・国内避難民に対して食料や救済物資を配布、水・衛生状況の改善に早急に着手する。

この演説を通じて、国際社会との協力をより強化することを強調した安倍総理。シリア情勢の他にも、差別や暴力に直面する女性たちへの支援を重視する意向も示した。JICA専門家として約15年、母子保健サービスの向上に努めた佐藤都喜子さんなどを例に挙げ、「日本の内でも、紛争下の地域、貧困に悩む国々でも『女性が輝く社会』をもたらしたい」と強調した。



第68回国連総会で演説する安倍総理(内閣広報室提供)



安倍総理の演説で「女性の活躍の象徴」として紹介された佐藤さん(左)。ヨルダンでは現地の保健省の職員たちと保健医療サービスの改善に奮闘。「プロジェクトは相手あってこそ。これだけはぶれなかったですね」



サイドイベントに登壇した安倍総理と岸田外務大臣



エチオピア・アムハラ州の病院で診察を待つ母子。日本は世界各地でUHCの普及につながる協力を実施(撮影:久野武志)

日 本政府は9月25日、国連総会のサイドイベントを主催。2015年に達成期限を迎える「ミレニアム開発目標(MDGs)」に続く「ポスト2015年開発アジェンダ」におけるユニバーサル・ヘルズ・カバレッジ(UHC)の役割について議論を交わした。

「第68回国連総会サイドイベント」 すべての人に 保健医療サービス届けたい!

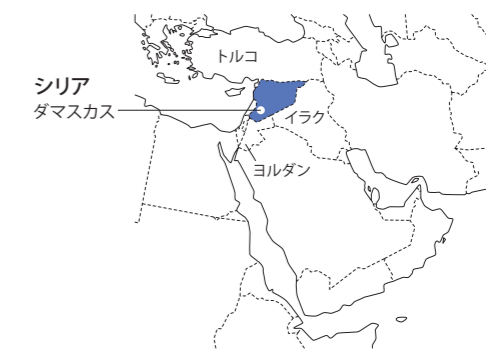
UHCとは、全ての人が必要な時に負担可能な費用で、基礎的な保健医療サービスを受けられること。安倍晋三内閣総理大臣は冒頭のあいさつで「早くから国民皆保険を導入し、保健医療に支えられた高度経済成長を遂げてきた日本だからこそ、ポスト2015年開発アジェンダではUHCは重要」と述べた。

国際会議

国際会議

「第68回国連総会」 シリア難民支援と 女性が輝く社会の実現

安倍晋三内閣総理大臣は9月24~27日、「第68回国連総会」に出席するためニューヨークを訪問した。



首都:ダマスカス
面積:18.5万km²(日本の約半分)
人口:2,082万人(2011年)
言語:アラビア語

世界各地で国際協力に取り組む日本人を写した写真展「世界で輝く日本人」(外務省主催)が、10月5、6日の「グローバルフェスタJAPAN2013」(東京・日比谷公園)で開催された。5日には表彰式が行われ、俳優の佐藤隆太さんらが、優秀作品を表彰した。

写真展「世界で輝く日本人」 途上国で奮闘する 日本人の姿を伝えたい!

PO法人難民を助ける会が、地道な活動の様子を写した「ひたむき賞」には、岡村匠さんと認定NPO法人パレスチナ子どものキャンペーンがそれぞれ選ばれた。また、「グローバルフェスタ協賛企業特別賞(H.I.S.賞)」には、バヌアツで活動する青年海外協力隊員を写した小寺英治さん、母子保健事業を実施するネパールの村で聞き取りを行う様子を写したNPO法人AMDA社会開発機構の作品が選ばれ、副賞として「アジアアトランティックエアラインズで行く!パンコク往復航空券」が贈呈された。

イベント

はつらつ賞



茂田敬介さん



難民を助ける会

ひたむき賞



岡村匠さん



パレスチナ子どものキャンペーン

協賛企業特別賞(H.I.S.賞)



小寺英治さん



AMDA社会開発機構

HIVと共に生きる

from カンボジア

緑の村の真実

首都プノンペンから車で走ること約1時間。高層ビルや大型ショッピングモールが軒を連ねる都市の姿はあつという間に過ぎ去り、赤茶色の道の両側に青々とした田んぼが見えてきた。そんなどかな村々の間に、緑色のトタン屋根の長屋が。トゥオルサンボと呼ばれるその地区には、2009年に首都から立ち退きとなったスラムの住人42家族が暮らす。近年の開発に伴い、スラムが相次いで首都から強制撤去される中、ここは極めて特殊な状況。そ

見える。このとき12歳になろうとしていた彼の身長は、7、8歳の子どもと変わらなかった。

母子をHIVから守る

HIVは、母親の薬の服用、帝王切開での出産、その後の母乳の遮断など適切な処置をした場合、母子感染率を5%まで抑えられるといわれている。しかしカンボジアでは、医療保険制度がほとんど整っていない。そのため特に貧困層の母親は、母子健康などに通わず、病院で出産する習慣も根付いていない。トイの母親、シボルさん(39)は語る。「自分の感染に気付かないまま、この子を産んでしまいました。でもあの時、病院に通えるだけのお金はなかったんです。きちんと診断を受けていたら……」。彼女はただうつぶさに語りだした。

その後の3年間で、エイズを発症した村人が一人、また一人と命を落としていった。そのたびにこの小さな村に、大きな不安がよぎった。職を求め、村を自ら去っていった者もいた。そんな中、一つの命の誕生が、村に新しい風を吹き込んだ。ヨッラーさん(42)と、パンナさん(62)という、村の片隅に暮らす年の離れた夫婦。ヨッラーさんは前夫をエイズで亡くし、

う、全家族が、HIVの感染者を抱えていたのだ。そして周辺の住人は、嫌悪を込めて「エイズ村」と呼んでいた。「ねえみんな、池に魚釣りに行こうよ！」

外で駆け回る子どもたちの輪の中に、ひととき元気のいい声が響き渡った。この村に暮らすトイという少年。6人兄弟の末っ子として生まれ、6畳ほどに仕切られた一部屋に、家族ぎゅうぎゅうで暮らしていた。魚やカニを捕まえるのは、兄弟たちの仕事。泥にまみれてキャッキヤとはしゃぐトイの姿に、周囲の大人も思わず笑みがこぼれる。

ある日のこと、いつも朝から走り回っている彼が、うつむいたまま外に出ようとしなかった。「どうしたの？何かあったの？」。そう声をかけても、「うん、うん」と曖昧に返事をするだけ。今日は月に一度、母親と首都に出かける日。ショッピングや遊園地に行くのではない、病院の診察を受けに行くという。トイは生まれながらにHIVに感染していた。父親が売春宿で感染し、その後母親にうつり、そして彼に感染してしまっただけ。現在カンボジアでは、HIV新規患者の3人に1人が母子感染。ウイルスと闘い続けているトイの体は、実年齢よりもはるかに小さく

彼女自身も夫から感染していた。再婚相手のパンナさんは、彼女がHIV感染者であることを知りながら結婚した。その2人に子どもが生まれたのだ。彼らの子どもにもHIVの感染は見られなかった。村人たちが、赤ちゃんの様子を見ようと代わる代わる訪ねてくる。トイも大人たちの後ろからそつと、その寝顔を見つめていた。

現在、緑のトタン屋根はなくなり、その場所には海外のNGOが建設したコンクリート造りの家が建てられている。彼らの居住環境は多少改善されたものの、首都から遠く離れた場所では職が見つかりづらく、病院までの交通費もかさむ。周囲の集落との摩擦など、不安要素は尽きない。ウイルスだけではなく、偏見とも闘いながら、村人たちは今日も、新しい命をつないでいる。

社会が抱えている問題は、残念ながら、たたくさんの人に認識されない限り「問題」として扱われることがない。しかしほとんどの場合、その当事者たちは、トイやその家族のように自ら声を出せない立場にいる。だからこそ、私たちが耳を傾け続けること、知ったことを誰かに伝え続けること。その行動の一つ一つが集うことで、エイズという、音のない戦争を止める力となるのではないだろうか。

<Profile>

やすだなつき

1987年神奈川県出身。studio AFTERMODE所属フォトジャーナリスト。16歳の時、「国境なき子どもたち」友情のレポーターとしてカンボジアを訪問。現在、カンボジアを中心に、東南アジア、中東、アフリカ各地で取材を進める。東日本大震災以降は、陸前高田市などの被災地も記録し続けている。2012年「HIVと共に生まれる—ウガンダのエイズ孤児たち—」で第8回名取洋之助写真賞受賞。共著に「アジア×カメラ「正解」のない旅へ」(第三書館)、「ファインダー越しの3.11」(原書房)。

ホームページ: www.yasudanatsuki.com

D. 電気はほぼ使えず、夜はろうそくの明かりを頼りに村を歩く
E. 夕方方のスクール。村人たちはその雨で洗濯を済ませる
F. 夜明けと共にまた魚釣りへ。雨期は恵みの季節だ

A. 村で生まれたばかりの子犬たち。番犬の世話も子どもたちの役割だ
B. 診察が始まると、トイの顔がますますこわばっていく
C. 赤ちゃんの笑顔に、パンナさん一家に温かな時間が流れる



自慢の民族衣装を身にまとった女性たち。オアハカ州フチタンに
伝わる伝統的な踊りは、パイナップルを持ったユニークなもの

地球ギャラリー vol.62

Mexico

[メキシコ]

写真・文＝大塚雅貴(フォトグラファー)



伝統が息づく町

まぶしい日差しが大地を照らし、心地良い風に吹かれて木々を彩る赤い花が揺れていた。標高約1500メートル、緑豊かな山々に囲まれた空間には、穏やかな時間が流れている。首都メキシコシティから南東に約400キロ、世界遺産の町オアハカだ。

市街地から車で20分ほどのところにあるのが、中央メキシコ最古のモンテ・アルバン遺跡。西暦500年ごろには2万5000もの人が暮らし、ピラミッド型の遺跡は祭壇の役割を果たしていたという。その壮大な景観からも、当時の繁栄ぶりが伝わってくる。

そして1987年、この遺跡と共に世界文化遺産に登録されたのが、オアハカ歴史地区だ。路地裏からは子どもたちの声が聞こえ、カフェは午後のひと時を過ごす人々にぎわっている。



世界文化遺産に登録されているコロニアル建築の建物が並ぶ旧市街。いつも多くの観光客でにぎわっている



石畳の道が張り巡らされた旧市街。古い住居と織り成す町並みが美しい



メキシコ料理にトウガラシは欠かせない。その種類も豊富だ



トマト、アボカド、リンゴ、ブドウなど、市場にはたくさんの食材が並ぶ



山の上に造られたモンテ・アルバン遺跡。南北にそびえ立つ巨大なピラミッドの上から見る遺跡は絶景だ



人口は約27万人。山々に囲まれたオアハカは緑に包まれた自然豊かな町だ



パステルカラーに包まれたオコタラン村にある教会は、人々の憩いの場となっている

タペテは羊毛から糸を紡ぎ、染め、そして織る。機械化せずに今も古き良き伝統を守り続けている



土産物店では多くの女性が真剣なまなざしで置物に色付け作業を行っていた



「1個どうだい?」。自慢の製品を売る男性



トルコルーラ村の市場には、職人が丹精込めて作り上げたタペテが並ぶ

床に座って織るのは、腰織という伝統的な方法。赤や青といった原色をベースに明るい製品に仕上げている

一つ一つ手作りで仕上げている刺しゅう。オリジナリティーあふれる製品は外国人観光客からも人気



その色彩の魅力にひかれ、郊外にある伝統工芸の町に足を延ばしてみた。車で30分ほどのサンアントニーノ村で出会ったのが、小さな花柄模様の刺しゅうの洋服を作る女性。椅子に座って黙々と作業を続けるそのまなざしは、女性らしさの中にも力強さを感じる。
手に取ると、花や鳥の刺しゅうが一つ一つ細かく施されているのが分かる。鮮やかさの中にある繊細さ、独自のデザイン。一着を仕上げるまでに、数カ月もの時間を費やすこともあるという。その手作りのぬくも

りや素朴さが、いつの時代も、多くの人に愛される理由だろう。
天然素材のみを使った羊毛織物がタペテ。派手な色使いや独創的な模様で国内外で人気の商品。毛糸を紡ぐことから始まり、黒、黄、青、赤に染め、織ってゆく。職人の自慢の一品が家族の生活を支えている。
多くの伝統工芸が息づくオアハカ。「この町が好きだ」。この土地に暮らす人々はそう話す。伝統を守りながら、一つの仕事に誇りを持って暮らす彼ら。その自然で穏やかな暮らしが、うらやましく思えてならなかった。



花や蝶などの愛らしい柄があしらわれている

ピニャータ割り



[上]カラフルに飾りつけられたピニャータ。専門店ではさまざまな種類が売られている
[下]誕生日に用意されたのは、なんとお姫様の形をしたピニャータ!

メキシコの子どもたちが大好きなピニャータ割り。誕生日やクリスマスなど、特別な日に行われる恒例行事だ。

ピニャータとは、昔は土鍋、今は紙製のくす玉のような入れ物を、色とりどりの紙で飾りつけたもの。街中にはなんと専門店も。星、ロバ、カメ、UFOなどに形作られたピニャータが売られている。

ひもをつけて、大人が両端を持ってぶら下げたら準備完了。子どもたちはバンダナで目隠しをし、棒で順番にピニャータをたたいていく。「もっと右!」「もっと左!」。周りから掛け声が飛ぶ様子は、まるで日本のスイカ割り。ピニャータの中には、実はチョコレートやあめがいっぱい。割れた瞬間に散らばるお菓子を、子どもたちは一目散りに拾い集める。

一人目でピニャータが割れてしまっただけではたまらない。一人でも多くの子が挑戦できるように、大人たちはひもを上下左右に揺らし、簡単に割られないように頑張るのだ。



毎年9月に東京・お台場で開催されるメキシコ文化イベント「フィエスタ・メヒカーナ」でも体験できる

取材協力：日本ラテンアメリカ文化交流協会

地球ギャラリー

メキシコの文化を 知ろう!

メキシコ料理に欠かせないのが、日本でもおなじみの「サルサ」。何種類ものトウガラシをトマトやタマネギ、ニンニクなどと混ぜたソースは、完熟トマトを使った赤色や、熟す前のグリーントマトと混ぜた緑色が基本。主食であるトウモロコシの生地を焼いた「トルティージャ」はもちろん、肉や魚、野菜などのおかずとも相性抜群。いろいろな料理にかけて食べる。

そんなサルサと同じく、メキシコ料理を代表するソースが「モーレ」。こちらもトウガラシをたっぷり使っているが、なんとこのソース、味の主役は

チョコレート。カレーのように肉やコメにかけて一緒に食べるというが、一体どんな味がするのやら。口に入れると、とろっとした甘みが広がり、その後にトウガラシの辛みが続く。肉とコメにもよく合い、食が進む。

横浜・関内にある「AZTECAS」は、メキシコ出身のゲレロ・エルナンデス・アルバロさんが「アステカ帝国の時代から伝わる本場の味を日本の皆さんに届けたい」と始めたお店。アステカ王の銅像の前で、本場の味を楽しめる。

メキシコ料理といえば 甘くて辛いチョコレートソース

モーレ



●材料(4人前)

アンチョリ、ムラトチリ、パシヤチリ各1本(もしくはトウガラシ3本)／タマネギ2分の1個／ニンニク2分の1片／ピーマン1個／トマト2分の1個(みじん切り)／食パン3分の1枚／アーモンド、ピーナツ各20g／ゴマ大さじ1杯／無糖チョコレート100g／シナモンパウダー、塩、砂糖少々

【RECIPE】

- ① 細かく切ったトウガラシ、タマネギ、ニンニク、ピーマンを軟らかくなるまでゆでる。
- ② ①と、残りの材料をミキサーに入れ、全てつかる程度の水を加える。
- ③ ②が液状になるまでミキサーにかけたら、ざるに通して鍋に入れ、弱火で約20分煮込んだら出来上がり。

【SHOP INFORMATION】



AZTECAS (アステカス)
〒231-0014
神奈川県横浜市中区常磐町4-52
文乃家ビルB1階
TEL:045-662-5866
営業時間:17~24時(月~土)、
15~23時半(日祝)

イチャオシ!

M OVIE

『自由と壁とヒップホップ』

イスラエル領内にあるパレスチナ人居住区。そこに暮らす人々は貧困や差別、暴力に苦しめられてきた。そんな絶望的な状況をヒップホップのリズムに乗せて歌い、怒りを叫び、子どもたちに夢を語る若者たちが、パレスチナ初のヒップホップグループ「DAM」。彼らは各地のパレスチナ人のラッパーたちに呼び掛け、ヨルダン川西岸地区での合同ライブを企画。しかし、そこに立ちだかっただのは、居住区を隔てる分離壁や検問所。果たして彼らは、無事に集結することができるのか。音楽の力を使い、さまざまな壁を乗り越えようとする若者たちを追ったドキュメンタリー。



© 2008 Fresh Booza Productions, LLC.

2008年 / パレスチナ・アメリカ / 86分
 監督：ジャッキー・リーム・サローム
 公開：11月下旬よりシアター・イメージフォーラム(東京)ほか全国順次公開
 URL：www.cine.co.jp/slingshots_hiphop
 配給・問：シグロ
 TEL：03-5343-3101

E VENT

来場者100万人達成～JICA地球ひろばに行こう!

2006年の開館から7年、今年10月に来場者100万人を達成したJICA地球ひろば。11月は日本と友好60周年を迎えたカンボジアにスポットを当て、国情報をまとめたパネルや、現地の写真、民芸品などを展示。内戦を乗り越え経済発展に突き進む姿や、それを支える日本の支援を紹介するセミナーなどを開催する。併設のJ's Cafeでは、「大使館お墨付きランチ」としてカンボジア料理を提供予定。「いろいろなかんボジアを知ることができる絶好の機会。見て・聞いて・触って国際協力を体感できるJICA地球ひろばに足を運んでみよう。

- カンボジア展：11月5日(火)～12月8日(日)
- 関連セミナー
 『「地雷」と「内戦」を越えて』：11月14日(木)19時～
 『カンボジア最新動向について—ODA案件を中心として—』：12月6日(金)18時半～
 会場：JICA地球ひろば(東京・市ヶ谷)
 URL：www.jica.go.jp/hiroba/
 問：地球案内デスク
 TEL：0120-76-7278

B OOK

『世界女の子白書』

海外の女の子たちは、どんな服を着て、何を食べて、どんな恋をしているのだろうか。そんなあなたの疑問に答えてくれるのが、彼女たちの“日常”を写真付きで紹介した本書。カラフルな伝統衣装を身にまとったタンザニアの女の子、カレーを手で食べるネパールの女の子…。どんなに貧しくても、そこには生き生きとした笑顔がある。一方で、学校に行けなかったり、HIV／エイズに感染してしまったり、好きでもない人と結婚させられたりといった、つらい現実もある。彼女たちの力になりたい。世界中の女の子の幸せを願って、身近にできる国際協力のヒントを教える一冊。



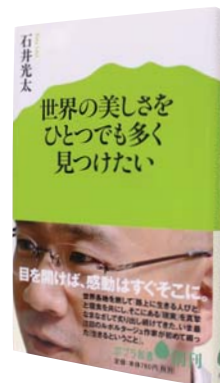
この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

電通ギャララボ 編
 公益財団法人ジョイセフ 監修
 木楽舎
 800円(税込)

B OOK

『世界の美しさをひとつでも多く見つけたい』

アジア各国のスラムや路上に暮らす人々の生活を描いた『物乞う仏陀』、イスラム世界の性や売春を題材にした『神の棄てた裸体』、東日本大震災後の遺体安置所で働く人々に密着した『遺体—震災、津波の果てに』など、数々の話題作を生み出してきた著者。日常からかけ離れた過酷な現場に足を運び、取材を重ねる理由はただ一つ、「困難に直面する人々の優しさ、たくましさ、必死さを伝えたいから」。“人間の美しさ”を追い続ける著者が、これまでの自分と向き合って描いた作品。



この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

石井光太 著
 ポプラ社
 819円(税込)

読者の声

「7月号特集 エネルギー「未来を照らす力」を読んで」

■世界の1/4の人々が電気を使えないことを知り、日本が改めて恵まれた国だと実感しました。また、国内の格差で生活ラインの差があることも残酷だと感じます。格差が縮まるよう援助がさらに増えてほしいです。
(福岡県/女性/33歳)

■当然と考えていたことが当然でなく、どんなにありがたいことか。本誌を読むといつも思う。エネルギー不足に向けた解決もそうである。スイッチを押せば電気がつき、蛇口をひねれば飲み水が出る。資源を持たない日本でこんな生活ができて助かっている。エネルギー枯渇危機も考慮に入れて、日本も世界も今、エネルギーの在り方を考えなくてはならないと思う。
(愛知県/女性/65歳)

「8月号特集 感染症「守られるべき命」を読んで」

■人間である以上、寿命があるわけで、どんな環境の下に置かれていても、生を受けた以上、未来を担う子どもたちの命は大人たちが守らなければなりません。それが責任であり使命であると考えています。狭くて平和な日本で自分のことだけしか考えていない人間が多い中、もっと世界に視野を広げなければと痛感しました。
(北海道/男性/62歳)

■勤務先の中学校に本誌の記事を拡大コピーして廊下に掲示し、全校朝会でも生徒に紹介させていただきました。「世界とつながる教室」の生徒ではないけれど、みんなが海外に行けるわけではないので、本誌の情報を少しでも生徒たちに伝えたいと考えたからです。私にとって、本誌は生徒たちを世界へいざなう鍵のような存在です。
(鹿児島県/男性/57歳)

■日本にいなが異なる文化・環境・価値観の中で生活をしている人々に思いをはせることができ、世界が広がります。また、青年海外協力隊員の方々の熱意に刺激されました。思いをはせるだけではなく、私にも何かできないかウズウズしてきます。この気持ちは行動につなげていきます。(東京都/女性/23歳)

本誌へのご意見・ご感想や JICAへのご質問をお寄せください。



添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2013年12月15日

Eメール：jica@idj.co.jp
FAX：03-3221-5584 (『mundi』編集部宛)

- ① タイのポーチ
- ② 書籍『世界女の子白書』(p37参照)
- ③ 書籍『世界の美しさをひとつでも多く見つけたい』(p37参照)



本誌をご希望の場合は下記方法でお申し込みください。

申込方法

本誌をご希望の方には、送料をご負担いただく形でご送付いたします。巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送付期間・送付開始月を明記の上、指定の金額を郵便局でお支払いください。入金確認後、発送手配をいたします(入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください)。複数冊、またはバックナンバーをご希望の方は送料が異なりますので、下記までお問い合わせください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 総務部(発送代行)
住所 〒102-0083 東京都千代田区麹町3-2-4 麹町HFビル9F
TEL 03-3221-5583
FAX 03-3221-5584
Eメール order@idj.co.jp



次号予告 (2013年12月1日発行予定)

研修 in JAPAN

百聞は一見にしかず。日本の技術や経験を学ぶために、開発途上国から来日する研修員は年間約1万人。北海道から沖縄まで、日本各地で奮闘する研修員、彼らの学びを応援する日本人の姿を紹介します。

mundi

NOVEMBER 2013 No.2

編集・発行/独立行政法人 国際協力機構 Japan International Cooperation Agency : JICA

〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル
TEL : 03-5226-9781 FAX : 03-5226-6396 URL : http://www.jica.go.jp/
バックナンバーはJICAホームページ (http://www.jica.go.jp/publication/mundi) でご覧いただけます。
本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。



©Yuki Asada

お母さんの優しさが詰まったポーチ

「素敵なモノを仕上げたら、みんなが幸せになれるのよ」。笑顔でそう話しながら、使い込んだミシンをカタカタ踏むお母さんたち。農作業の合間の針仕事は、女性たちの仕事。赤、青、黄、緑…。机の上に並ぶ色鮮やかな布が、見る見るうちに、かわいらしいポーチに生まれ変わっていく。

そんな“素敵なモノ”を日本に運んでいるのは、この地で活動した青年海外協力隊OGの美濃部智香さん。「コメどころで食べるものには困らない村ですが、雇用がなく、過疎化が進んでいました」。次々と都市に出て行ってしまおう若者たちを見ながら、お母さんたちはどこか寂しそう。その姿を目の当たりにした

美濃部さんは、「この村を元気にしたい!」と、日本でお店を立ち上げることに。店名は「Tam dii mii suk.」。ものづくりが幸せにつながる。そんな思いを込めたタイ語にした。

商品は洋服から雑貨までさまざま。デザインは農村の女性たちと相談しながら決めている。「タイに伝わる伝統を生かしながらも、日本人にも長く使ってもらえるよう、新しい流行も取り入れていきたい」と美濃部さん。作業場はいつも笑いとアイデアであふれている。

お客さんも作り手も幸せになれるようなものづくり。女性たちの優しさにあふれたポーチを、ぜひ一度手に取ってほしい。



足踏みミシンは使い慣れたもの。代々受け継いできた技術だ

★タイのポーチを1人にプレゼント! → 詳細は38ページへ

★商品はホームページ(tamdiimiiisuk.thebase.in/)から購入可能。12月7~8日には北沢ギャラリーKasutelaで期間限定ショップを開店。詳細はfacebookの専用ページ(www.facebook.com/tamdiimiiisuk)へ。





Vol. 37

PROFILE

古賀いずみ、漆戸啓によると同士のポップデュオ。サッポロビール「冬物語」のCMソング「冬のファンタジー」が70万枚超の大ヒット。2013年に全国公開されたインパルス主演の映画「樹海のふたり」のエンディングテーマを担当。最新CDに収録されている「wave」は日本各地の小学校を中心に合唱曲として歌われている。岩崎良美、天童よしみ、山下智久他著名アーティストへの楽曲提供多数。UN Women(国連女性機関)さくら親善大使。その他、国境を超えたさまざまなプロジェクトで活躍中。「なんとかしなきゃ!プロジェクト」著名人メンバー。

ある日、私たちのウェブサイトを通じて一通のメールが届きました。差出人はなんとウガンダで活動する青年海外協力隊員。「僕の学校の生徒たちと一緒に歌を作ってもらえませんか」という内容でした。

「来ちゃった、アフリカ!」。メールを見た瞬間、そう思いました。アフリカにはずっと興味があって、ちょうど調べ始めていたところだったからです。「ぜひ協力させてください」。不思議な縁を感じ、すぐにそうお返事しました。何よりも「生徒たちの自信につながるような体験をさせてあげたい」という、隊員の方の思いがひしひしと伝わってきたことも大きかった。まずはどんな歌を作りたいか、何でもいいからアイデアを送ってほしいと伝えました。

しばらく返事がなく「どうしたのかな」と思っていたら、2カ月後に歌詞と共にファイルが届きました。なんとアカペラで歌われたデモ音源でした。オリジナルのメロディーに乗せられた生徒

たちの歌声。その何ともいえないアフリカの息吹に心躍りました。

そこから、海を超えたメールのやり取りが始まりました。その音源を基に、私たちのアイデアを加えさせていただきながら、より希望へとつながるエネルギー溢る歌詞、ハーモニー、誰もが覚えやすいポップなサビを付け足しました。さらに「アフリカンドラムも入れよう」と現地の子どもたちからの提案も。こうして「The Pearl of Africa」は、みんなの力で完成に向かっていきました。

そんなやり取りを通じて、私たちも「現地に行ってみて一緒に歌いたい」という思いが強まっていきました。一通のメールから始まり、その波紋がどんどん広がって行って…。多くの方の協力を得て、なんとウガンダでのレコーディングが実現してしまっただけです。

初めてのアフリカ。圧倒されるほど広大な大地。ついに、夢に見たアフリカにやってきました。そんな思いで空港に到着すると、一緒に曲を作った子どもたちが



“アフリカの真珠”を歌いたい

歌手 カズン

Cousin

大歓迎してくれて、うれしさと感動があふれてきました。

教室をスタジオにして、早速レコーディング開始。みんなで合唱し、ソロパートを歌い、迫力のアフリカンドラムも合わさって、全てが奇跡のセッションでした。

今回の活動を通じて、アフリカは決して特別な存在ではないと強く感じました。距離は遠いけれど、そこには、思春期ならではの悩みを抱える子どもたち、厳しくも温かく彼らを見守る先生がいた。日本と何ら変わりなく、みんな同じ時代を生きているのです。そんな当たり前のように、日本ではなかなか気付かなかった宝物を、私たちはウガンダでもらったのです。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

なんとかしなきゃ で 検索

「The Pearl of Africa」を聞きたい方は、<http://youtu.be/Jbsa-Tc9q3g>へ。